

内藤吉之助教授略年譜・著作目録(改訂稿・第二十二次補正稿)

(作成経緯)

- HP 初出：(平成 19 〈2007〉年 8 月 16 日改訂稿作成)
- (平成 19 〈2007〉年 12 月 12 日第一次補正稿作成)
 - (平成 19 〈2007〉年 12 月 18 日第二次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 1 月 10 日第三次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 1 月 11 日第四次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 1 月 23 日第五次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 8 月 12 日第六次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 8 月 19 日第七次補正稿作成)
 - (平成 20 〈2008〉年 11 月 23 日第八次補正稿作成)
 - (平成 21 〈2009〉年 2 月 5 日第九次補正稿作成)
 - (平成 21 〈2009〉年 2 月 15 日第十次補正稿作成)
 - (平成 21 〈2009〉年 3 月 18 日第十一次補正稿作成)
 - (平成 21 〈2009〉年 3 月 31 日第十二次補正稿作成)
 - (平成 21 〈2009〉年 11 月 15 日第十三次補正稿作成)
 - (平成 22 〈2010〉年 9 月 15 日〈水〉第十四次補正稿作成)
 - (平成 22 〈2010〉年 10 月 16 日〈土〉第十五次補正稿作成)
 - (平成 24 〈2012〉年 3 月 5 日〈月〉第十六次補正稿作成)
 - (平成 26 〈2014〉年 5 月 27 日〈火〉第十七次補正稿作成)
 - (平成 27 〈2015〉年 2 月 10 日〈火〉第十八次補正稿作成)
 - (平成 29 〈2017〉年 3 月 5 日〈日〉第十九次補正稿作成)
 - (平成 29 〈2017〉年 9 月 6 日〈水〉第二十次補正稿作成)
 - (平成 29 〈2017〉年 12 月 12 日〈火〉第二十一次補正稿作成)
 - (平成 30 〈2018〉年 8 月 29 日〈水〉第二十二次補正稿作成)

(各次改訂要旨)

・本著作目録は、『栗生武夫先生・小早川欣吾先生・戴炎輝博士・小林宏先生・山崎丹照先生略年譜・著作目録(二訂版)―内藤吉之助教授・金田平一郎博士著作目録(初稿)―ローマ法・法制史学者著作目録選(第八輯)―』(上山安敏先生の序文あり。平成19(2007)年1月1日刊)所収の「内藤吉之助教授・略年譜・著作目録(初稿)」及び同「刊行の葉」(「内藤吉之助教授・略年譜・著作目録(初稿)」拾遺)を改訂したものである。(改訂稿作成:平成19年8月16日)

・雑誌『随筆』所載関係(大正15年、昭和2年)を追加するとともに、誤植を一、二訂正した。(第一次補正稿作成:平成19年12月12日)

・従前頁数のみを誌していた戸沢鉄彦氏「京城帝国大学創立五十周年にあたって」『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』(京城帝国大学同窓会、非売品、昭和49年10月30日刊)109頁の表題を明示した。

(第二次補正稿作成:平成19年12月18日)

・松岡静雄氏、松岡磐木氏関係著作(平成2年刊)の件、『社会学雑誌』第25号(大正15年5月1日刊)所収書評の件、田川孝三氏『朝鮮学報』第48輯(昭和43年7月20日刊)の件を追加するとともに、誤植その他を修正した。

(第三次補正稿作成:平成20年1月10日)

・柳田国男氏関係著作(昭和63年刊)の件を追加するとともに、記載内容の全体構成を変更した。(第四次補正稿作成:平成20年1月11日)

・『我等』所収論稿(昭和2年刊)関係記述を補正するとともに、二、三誤植を訂正した。(第五次補正稿作成:平成20年1月23日)

・『定本 柳田國男集』、『柳田國男全集』等の件を追加するとともに、内藤先生の出身高校が第七高等学校造士館であることを示した。

(第六次補正稿作成:平成20年8月12日)

・「朝鮮総督府中樞院[編]内藤吉之助校訂『受教輯要』(中樞院版)(朝鮮総督府中樞院、昭和18年3月30日刊)」の件について補正するとともに、本稿で使用参照したHPの現状に関して言及した。

(第七次補正稿作成:平成20年8月19日)

・内藤先生の東京府立第一中学校卒業年次(明治44年)を確認した。その他誤植を一、二訂正した。また、「[参考]「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」の件」を独立させて、末尾に附載した。

(第八次補正稿作成:平成20年11月23日)

・ゾーム著、久保正幡・世良晃志郎訳『フランク法とローマ法―ドイツ法史への序論―』(岩波書店、昭和17年4月15日刊)「凡例」の件を追加した。

(第九次補正稿作成:平成21年2月5日)

・中山太郎『日本巫女史』(大岡山書店、昭和5年3月20日刊。増補復刻版:パ

ルトス社、昭和 59 年 1 月 5 日刊引用の内藤先生関係文献を、「(2) 論説その他」中に「(調査中)」として記載した。

(第十次補正稿作成: 平成 21 年 2 月 15 日)

・安倍能成『我が生ひ立ち—自叙伝—』(岩波書店、昭和 41 年 11 月 28 日刊)の件等を追加した。

(第十一次補正稿作成: 平成 21 年 3 月 18 日)

・通堂あゆみ「京城帝国大学法文学部の再検討—法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に—」『史学雑誌』第 117 編第 2 号(平成 20 年 2 月 20 日刊)の件を追加するとともに、『文章世界』、『太陽』の件につき一、二補正した。

(第十二次補正稿作成: 平成 21 年 3 月 29 日)

・岡 正雄『異人その他』(言叢社、昭和 54 年 12 月 1 日刊)の件を追加するとともに、その他一、二補正した。

(第十三次補正稿作成: 平成 21 年 11 月 15 日)

・申鎮均「内藤吉之助著 朝鮮民政資料 牧民篇」の件を追加するとともに、その他〔参考〕箇所を、一、二補正した。

(第十四次補正稿作成: 平成 22 年 9 月 15 日)

・牧 健二「朝鮮法制史料の刊行」『法学論叢』第 35 巻第 3 号(昭和 11 年 9 月 1 日刊)の件を追加するとともに、その他一、二補正した。

(第十五次補正稿作成: 平成 22 年 10 月 16 日)

・「国立国会図書館のデジタル化資料」〈<http://dl.ndl.go.jp/>〉(平成 23 年 7 月新設との由)で補正した。

(第十六次補正稿作成: 平成 24 年 3 月 5 日)

・酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』(ゆまに書房、平成 26 年 2 月 25 日刊)の件を追加した。

(第十七次補正稿作成: 平成 26 年 5 月 27 日)

・広津和郎「森れじな」関連『読売新聞』昭和 7 年 7 月末諸記事を追加した。

(第十八次補正稿作成: 平成 27 年 2 月 10 日)

・略年譜の一部を復活、掲載するとともに、関連著作の追加をした。

(第十九次補正稿作成: 平成 29 年 3 月 5 日)

・鹿島守之助氏(内藤教授の従弟)関係文献、「雑誌記事索引集成データベース(ざっさくプラス)」関係記載の一部を修正した。

(第二十次補正稿作成: 平成 29 年 9 月 6 日)

・表題「内藤吉之助教授(1894~1946)著作目録」を「内藤吉之助教授略年譜・著作目録」に変更するとともに、田鳳徳著、渡辺 学・李丙洙訳『李朝法制史』(北望社、昭和 46 年 2 月 25 日刊)関係記事で著作「論説その他」、関連著作を追加した。

(第二十一次補正稿作成: 平成 29 年 12 月 12 日)

・久保正幡先生関連文献、『法史学研究会会報』第 21 号(岡野誠先生退休記念号、平成 30 年 3 月 26 日刊)所載「内藤吉之助教授について一略年譜、著作目録抄、その他一」その他の件を追加した。

(第二十二次補正稿作成: 平成 30 年 8 月 29 日)

〔目 次〕

1 はじめに	5
2 略年譜	6
3 著作目録	8
(1) 訳書・編書	8
(2) 論説その他	10
(3) 内藤吉之助教授関連著作	14
(4) 『イソラベラ』と内藤吉之助教授	21
[参考 1] 「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」の件	23
[参考 2] 「国立国会図書館サーチ(開発版)の公開」の件	25
[参考 3] 「国立国会図書館のデジタル化資料」の件	25

「法制史学者著作目録選」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

1 はじめに

内藤吉之助教授(1894~1946)邦訳のフリードリヒ・エンゲルス(1820~1895)『家族・私有財産及び国家の起源』(れしな荘、大正 11 年 1 月 10 日刊。復刻: 彰考書院、昭和 22 年 2 月 25 日刊)は、同書の本邦初翻訳として著名であるが、教授の御名前に初めて接したのは、その昔さる先生の外国法(法史・独)の講義を受講した時である。それは、オイゲン・エールリッヒ(1862~1922)『Grundlegung der Soziologie des Rechts』(『法社会学の基礎理論』、1913 年刊)の講読であったが、同書が大正時代に日本に紹介された際に出た多くの論文の一つに、内藤教授の「エールリッヒの法律社会学」『国家学会雑誌』第 34 巻第 4 号(大正 9 年 4 月刊)があることを、この時教えていただいたことによる。その後、内藤教授に上記エンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』の邦訳があることを知り得たが、特に関心をもつようになったのは、平成 3(1991)年頃、知人から、船田享二博士(1898~1970)の全著作、特に京城時代のものを調べてほしいと依頼され、京城帝国大学関係者関連の様々な書籍に当たるようになってからである。

内藤教授は、戦後朝鮮から引き揚げてまもなく逝去されたとのことであるが、追悼録とか著作目録の類は出ていないと思われる。こうした中、まず参考となるのは、もとより昭和 22(1947)年 2 月に復刻された上記『家族・私有財産及び国家の起源』(彰考書院、昭和 22 年 2 月 25 日刊)に付けられた尾高朝雄博士(1899~1956)の序及び世良晃志郎教授(1917~1989)のあとがきである。これと同書の著者跋とで、教授の学問的なことはかなり判明するが、「森れじな」で有名なお若き日のことや御専門の朝鮮法制史研究のことについては、不明なことも多い。なお、翌昭和 23 年春に刊行された世良教授の処女作『封建制成立史序説』(法制史叢書第 2 冊、彰考書院、昭和 23 年 4 月 10 日刊)は、教授の恩師としての故内藤教授に捧げられている。

このため、個人的なことでは、内藤教授の従弟に当たる鹿島守之助氏(1896~1975、旧姓永富氏、鹿島氏御尊父と内藤教授御母堂が兄妹との由。)の多くの回想録がまず挙げられる。ここでは、同氏に思想的影響を与えた人物として内藤教授のことに言及され、明治末期に中学生時代の教授が「森れじな」(森れしな?)の名により文芸投稿で大きな評価を得られていたことがわかる。

この他では、教授の令弟内藤進一郎氏(?~1958)¹の御逝去を悼んだ高橋俊人氏(1898~1976)「内藤(進一郎)先生のことども一法輪院進阿即生居士に一」『藤嶺文学』第 17 号(藤沢高校〈現 藤嶺学園藤沢高校、<http://www.tohrei-fujisawa.ed.jp/introduction/history.html>) 文芸部、昭和 34

¹ 同氏につき〈<http://db.am.geidai.ac.jp/search.cgi?class=14;start=1601>〉参照。(平成 21 年 2 月 5 日追加) ⇒(平成 27 年 2 月 10 日補正)〈<http://jmapps.ne.jp/geidai/>〉参照。

年刊。平成 18 年秋復刻予定との由で、その前にネットに掲載されたようである。² (<http://sky.geocities.jp/ityou2/bungaku.html>) が極めて貴重であり、同稿のネット掲載により、様々なことを知り得る。そこでは、内藤教授の御尊父内藤久三郎氏のことを「内藤吉之助」と誤記しているが、文中の「兄」が内藤吉之助教授その人であり、特に柳田國男(1875~1962)、松岡静雄(柳田氏令弟、1877~1936)両氏や鹿島守之助氏との関係等若き日の内藤教授研究の手がかりを与えてくれる。

また、昭和 17(1942)年秋に城大に出講された久保正幡先生(1911~2010)も内藤教授の思い出をしばしば語ってみえたとお聞きする³。

内藤教授の著作は、城大赴任以前の論稿の一部がやや一般的でない雑誌に収録されていることもあって、その目録作成は従来やや難しい面があったが、幸いにも、最近「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」(皓星社)がネット公開 (<http://www.annex-net.jp/ks1/>) された⁴ので、これらに基づき、取りあえずのものを作成してみた。ただ、教授のことについては、なお今後の課題であるといわざるを得ず、大方の御示教を切にお願いするものである。

2 略年譜

(第 18 次補正稿までは省略していたが、第 19 次補正稿で一部を掲載した。平成 29 年 3 月 10 日追加)

明治 27(1894)年 7 月 5 日 兵庫県に出生

(鹿島守之助〈1896~1975、旧姓永富、従弟〉『永富家』〈鹿島研究所出版、昭

² 本 HP は、かなりの期間公開されていたが、平成 20(2008)年 8 月現在では削除されているようである。(平成 20 年 8 月 19 日追加。平成 21 年 3 月 18 日現在同状態にある。)

³ 久保先生自編の『久保正幡略年譜・主要著作目録』(製作: 洋販、平成 10 年 10 月 20 日刊)には「昭和 17(1942)年 6 月 30 日 本学年度 [昭和 17 年度学年暦はたしか昭和 17 年 4 月~9 月の間であるので、ここの学年暦としては昭和 18 年度のことか?] 京城帝国大学法文学部講師を委嘱され、10 月 18 日から翌月 19 日まで京城にて西洋法制史の集中講義を果たした。」(5 頁)とある。この時、もとより内藤吉之助教授とも会っておられる。なお、久保先生(報告)「中田薫先生の思い出と法制史学会の回顧」(法制史学会東京部会第 170 回例会、平成 7 (1995) 年 12 月 26 日 (火) 午後、於早稲田大学)の件も参照。(平成 30 年 8 月 30 日追加)

⁴ 本「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」については、従前はこの註記で誌したが、今回、独立させ、本稿末尾に、「[参考]「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」の件」として附載した。(平成 20 年 11 月 23 日修正、[参考] 新設)

(追記) その後「雑誌記事索引集成データベース(ざっさくプラス)」として公開されている。

〈 https://zassaku-plus.com/service/login?return_url=http%3A%2F%2Fzassaku-plus.com%2F 〉(平成 29 年 9 月 6 日追加)

和 43 年 11 月 1 日刊) 序 5 頁参照。)

明治 44(1911)年 3 月 東京府立第一中学校卒業

(高橋俊人「内藤 [進一郎] 先生のことども一法輪院進阿即生居士に一」『藤峯文学』第 17 号〈藤沢高校現〈現藤嶺学園藤沢高校〉文芸部雑誌か。昭和 34 年刊) 参照。内藤進一郎氏 (?~1958) は内藤教授令弟。)

(鹿島守之助〈1896~1975〉「私の履歴書」『私の履歴書 第 22 集』〈日本経済新聞社、昭和 39 年 11 月 25 日刊) 221 頁で内藤教授のことに言及、その後、同『私の履歴書』〈鹿島研究所出版会、昭和 39 年 12 月 20 日刊) 11、12 頁に再録。同稿は、更に『私の履歴書 経済人 7』〈日本経済新聞社、昭和 55 年 9 月 2 日刊) 281 頁、『私の履歴書 昭和の経営者群像 2』〈日本経済新聞社、平成 4 年 9 月 25 日刊) 92 頁等に転載されている。また、鹿島守之助『創造の生活』〈鹿島研究所出版会、昭和 43 年 6 月刊)、『鹿島守之助経営論選集第 13 巻 創造の生活』〈鹿島出版会、昭和 50 年 2 月 20 日刊) 18 頁にも再録。)

(木村毅〈1894~1974〉「文学少年としての鹿島さん」『鹿島守之助追懐録』〈鹿島守之助追懐録刊行委員会編集、昭和 52 年 12 月 3 日刊) 84~87 頁参照。「森れじな」のことにも言及。)

大正 4(1915)年 7 月 第七高等学校造士館卒業(第 12 回卒業 171 名、独法科)

大正 8(1919)年 7 月 東京帝国大学法学部卒業

同年 10 月 3 日 東京帝国大学法学部助手(その後助手をやめて大学院学生)(平成 30 年 8 月 30 日「大学院学生」の件追加)

昭和 3(1928)年 京城帝国大学法文学部教授

年月不詳 欧米に出張(在外研究)

昭和 9(1934)、10(1935)年頃 朝鮮総督府中枢院嘱託として『経国大典』等李朝期法典を校訂刊行。中枢院嘱託はその後も継続か。

昭和 18(1943)年 3 月 31 日~昭和 20(1945)年 3 月 31 日 京城帝国大学法文学部長(昭和 18 年時で正五位勲四等。『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』〈京城帝国大学同窓会、非売品、昭和 49 年 10 月 30 日刊) 口絵に内藤教授の小照あり。)

この頃の住所: 京城府旭町 2 ノ 49

昭和 20(1945)年末 朝鮮より引揚(下記尾高朝雄博士「序」)

昭和 21(1946)年 1 月 13 日 急逝(下記尾高朝雄博士「序」)

昭和 22(1947)年 2 月 25 日 エンゲルス著、内藤吉之助訳『家族・私有財産及び国家の起源』(彰考書院、昭和 22 年 2 月 25 日刊)が復刻される。(再版: 昭和 22 年 9 月 20 日刊、三版: 昭和 24 年? 月? 日刊 四版: 昭和 25 年 6 月 20 日刊。大正 11 年邦訳の復刻。尾高朝雄博士「序」、世良晃志郎教授「あとがき」あり。)

(依拠資料: 『昭和人名辞典』第4巻〈日本図書センター、昭和62年10月5日刊〉朝鮮72頁〈同書は『大衆人事録 第14版 外地 満・支 海外篇』〈帝国秘密探偵社、昭和18年11月22日刊〉の復刻本〉、『朝鮮人事興信録』〈朝鮮人事興信録編纂部、昭和10年4月1日刊〉329頁、『家族・私有財産及び國家の起源』〈エンゲルス著、内藤吉之助訳、彰考書院、昭和22年2月25日刊〉尾高朝雄序、下記岩野英夫教授御論稿、『東京府立第一中学校創立五十年史』〈東京府立第一中学校、昭和4年10月20日刊〉巻末の「如蘭會員及現在生徒名簿」45頁、『第七高等学校造士館同窓会會員名簿 平成2年』〈七高同窓会、平成2年10月25日刊〉101頁等に拠る。)

3 著作目録

*「国立国会図書館サーチ」〈<http://iss.ndl.go.jp/>〉参照。(平成24年3月5日追加)

(1) 訳書・編書

大正11(1922)年

・フリードリヒ・エンゲルス著 内藤吉之助訳『家族・私有財産及び國家の起源 リュイス・エチ・モルガンの研究に因みて』(仮綴、本綴、れしな荘 発売 有斐閣、大正11年1月10日刊)(エンゲルス: 1820~1895、モルガン: 1818~1881)

昭和9(1934)年

・朝鮮総督府中樞院[編] 内藤吉之助校訂『経国大典』(中樞院版)(朝鮮総督府中樞院、昭和9年10月25日刊)

【参考】(nacsis webcatによる。)経国大典註解 / [(李朝) 崔恒等原編 ; 田川孝三註解]: 檀國大學校附設 東洋學研究所, 1979.11 檀國大學校出版部 395p ; 22cm. -- (東洋學叢書 ; 第7輯) 注記: 影印版 ; 底本: 清州刊本(朝鮮學報第48輯) ; 解説: 車閔燮 別タイトル: 経国大典註解 著者標目: 崔恒(1408~1474) 田川孝三(1909~1988)

昭和10(1935)年

・朝鮮総督府中樞院[編] 内藤吉之助校訂『続大典』(中樞院版)(朝鮮総督府中樞院、昭和10年3月25日刊)(第2版: 昭和17年刊)

・朝鮮総督府中樞院[編] 内藤吉之助校訂『大典続録及註解』(中樞院版)(朝鮮総督府中樞院、昭和10年7月5日刊)(第2版: 昭和12年刊)

【参考】牧 健二(1892~1989)「〔批評と紹介〕朝鮮法制史料の刊行」『法学論

叢』第35巻第3号(昭和11年9月1日刊)〔批評と紹介〕128~131頁(平成22年10月16日追加)

【参考】田川孝三(1909~1988)「清州刊本経国大典註解について」『朝鮮学報』第48輯(昭和43年7月20日刊)152、153、165頁(追記:平成20年1月10日)田川孝三氏につき、山内弘「田川孝三先生の御逝去を悼む」『東洋文庫書報』第20号(1988)(財東洋文庫、平成元年3月24日刊)1-5頁参照。(平成20年1月17日追加)

昭和17(1942)年

・内藤吉之助編著『朝鮮民政資料 牧民篇』(編著兼発行印刷人内藤吉之助、昭和17年1月20日刊)434頁、23cm

(註: nacsis webcatによる。復刻: 朝鮮民政資料 牧民篇 / [内藤吉之助編著] 以文社、1977 注記: 原本の出版事項: 京城: 内藤吉之助、昭和17年1月(1942.1)、日本学術振興会補助出版; 原本奥付の標題表記: 朝鮮民政資料牧民篇; 韓国語による参考解説(以文社編輯室、1977.5)あり。別タイトル: 民政資料(牧民篇); 朝鮮民政資料牧民篇; 朝鮮民政資料: 牧民篇)

【書評】申鎮均「内藤吉之助著 朝鮮民政資料 牧民篇」『社会学研究』(日本社会学会)第1号(昭和19年6月刊??)(未見。皓星社「雑誌記事索引集成データベース」に拠る。申鎮均は、J.S.バーヂス著『北京のギルド生活』(生活社、昭和17年刊)の訳者か。大空社復刻本(平成10年5月刊)あり。)

〈<http://books.livedoor.com/item/1126839>〉 (平成22年9月12日追加)

昭和18(1943)年

・朝鮮総督府中枢院[編]内藤吉之助校訂『受教輯要』(中枢院版)(朝鮮総督府中枢院、昭和18年3月30日刊)(原本未見、復刻本実見(平成20年8月19日修正)。)

(註1 nacsis webcatによる。受教輯要 / 朝鮮総督府中枢院編 [京城]: 朝鮮総督府中枢院、1943.3、508p; 23cm 著者標目: 朝鮮総督府中枢院)

(註2: 復刻: 明治大学図書館所蔵本による。標題及び責任表示: 受教輯要 / 朝鮮総督府中枢院|編 内藤吉之助|校訂||ジュキョウ シュウヨウ 出版・頒布事項: ソウル: 正文社、1984.2.20 形態事項: 508p; 23cm その他の標題: RM:Shoujiao jiyao 注記: 影印版: 原本は1943年刊の〈各司受教〉(受教輯録)〈新補受教輯録〉影印したもの 本文言語コード: 中国語)

(註3: 受教: 朝鮮の歴代の国王がその時々が必要に応じて立法した王命法規、歴代の国王がその時々裁可した有司の上啓文。富谷至編著『東アジアの死刑』(京都大学学術出版会、平成20年2月25日刊)116、184、186頁参照。)(平

成 20 年 8 月 19 日追加)

昭和 22(1947)年

・エンゲルス著；内藤吉之助訳『家族・私有財産及び国家の起源』（彰考書院、昭和 22 年 2 月 25 日刊、再版：昭和 22 年 9 月 20 日刊、三版：昭和 24 年？ 月？ 日刊 四版：昭和 25 年 6 月 20 日刊）（大正 11 年邦訳の復刻。尾高朝雄博士の「序」、世良晃志郎教授の「あとがき」あり。尾高博士「序」によれば久保正幡教授、世良晃志郎助手（当時）が協力して若干の修正を加えたとあり、世良「あとがき」によれば大部分は世良教授が加筆したとある。ちなみに、世良教授は内藤教授のことを「私の恩師、故内藤吉之助先生」といつている。）

(2) 論説その他

明治 43(1910)年

・『文章世界』投稿欄(主として「文叢」)にあるもの（紅野敏郎〈1922~〉編『文章世界総目次・執筆者索引』〈近代文学館、マイクロ版、製作・発売：八木書店、昭和 61 年 2 月 28 日刊、〈明治 39 年 3 月〈創刊号〉~大正 10 年 12 月〈改題「新文学」終刊号〉〉 290 頁の「投稿者索引：投稿者 森れじな」に拠る。）第 5 巻第 4 号(明治 43 年 3 月 15 日刊、3 箇所)、第 5 巻第 5 号(2 箇所)、第 5 巻第 6 号(1 箇所)、第 5 巻第 7 号(1 箇所)、第 5 巻第 8 号(1 箇所)、第 5 巻第 10 号(6 箇所)、第 5 巻第 11 号(2 箇所)に投稿ありし由。うち、原本目次に題名の記載あるものは、以下のとおり。※は『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』第 54 巻〈文芸編〉(大空社、平成 6〈1994〉年 11 月刊)にも収録。

※(小説)中学生の手紙 文章世界(博文館)第 5 巻第 4 号(明治 43 年 3 月 15 日刊)218~221 頁

(公開状)夏目漱石先生に(夏目漱石: 1867~1916) 文章世界第 5 巻第 6 号(明治 43 年 5 月 1 日刊)

(評論文)自由劇場第二回試演、(長詩)昼寝、(はがき文)返事、(書簡文)浜一に与ふ 文章世界第 5 巻第 10 号(明治 43 年 8 月 1 日刊)

明治 44(1911)年

・『文章世界』第 6 巻第 2 号(3 箇所)、第 6 巻第 3 号(2 箇所)、第 6 巻第 5 号(2 箇所)、第 6 巻第 8 号(1 箇所)、第 6 巻第 9 号(1 箇所)、第 6 巻第 10 号(明治 44 年 7 月 15 日刊、2 箇所)に投稿ありし由。うち、原本目次に題名の記載あるものは、以下のとおり。※は『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次

総覧』第54巻〈文芸編〉(大空社、平成6〈1994〉年11月刊)にも収録。

(書簡文)連中に与ふ 文章世界第6巻第2号(明治44年1月15日刊)102~103頁(一等、賞金4円、姫路市坊主町7内藤方 森 れじな〈この部分:平成21年3月31日追加〉)

※(小説)若葉の枝 文章世界第6巻第5号(明治44年4月1日刊)214~215頁(秀逸)

(小説)錘 文章世界第6巻第8号(明治44年6月1日刊)215~217頁(佳作)

(小説)曙光青葉蔭 文章世界第6巻第9号(明治44年7月1日刊)218~219頁(佳作)

・中学生(名義:森れしな) 太陽(博文館)第17巻第8号(明治44年6月1日刊)(第9回懸賞小説)205-214頁(ここでは「れしな」である。「れじな」との差異は不明。末尾に、「作者住所 牛込区新小川町2-2松岡宅」とある。松岡静雄氏宅か。〈この部分:平成21年3月31日追加〉)。なお、『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』第5巻〈総合編〉(大空社、平成5〈1993〉年5月22日刊)131、132頁も参照。

(第9回懸賞小説:島崎藤村〈1872~1943〉選で、森れしな「中学生」は、常夏「親子」とともに佳作〈謝金50円〉となる。島崎藤村「募集小説を読む」〈228、229頁〉:「理解力に富んだ作者だといふことを思はせる。あるひは、その特色は早く事物を看取せしめて、作者をして長く芸術の人たらしめないかも知れない。」)⇒(平成27年2月10日追加)「(3)内藤吉之助教授関連著作 昭和7(1932)年」分参照。

(追加)

『太陽』懸賞小説及『脚本』当選作一覧(第1回~第10回、明治43年/1910年度~明治44年/1911年度)第9回(選考委員:島崎藤村)(平成30年8月30日追加)
〈<http://prizesworld.com/prizes/novel/taik.htm>〉

大正9(1920)年

・法の本質につきて 国家学会雑誌第34巻第2号(大正9年2月刊)119-122頁
・エールリッヒの法律社会学 国家学会雑誌第34巻第4号(大正9年4月刊)109-117頁(註:エールリッヒ:1862~1922)

・〈書評〉本庄法学士の『経済史研究』 国家学会雑誌第34巻第7号(大正9年7月刊)115-117頁(註:本庄栄治郎〈1888~1973〉『経済史研究』〈弘文堂書房、大正9年刊〉)

・ロシア労農共和国の委員会制度 国家学会雑誌第34巻第9号(大正9年9月刊)134-138頁

大正 10(1921)年

・文化現象としての法律—比較法学の序論(コーラー) 国本第 1 巻第 2 号(国本社、大正 10 年 2 月 1 日刊)74-94 頁(邦訳。ヨーゼフ・コーラー: 1849~1919。「国立国会図書館のデジタル化資料」〈<http://dl.ndl.go.jp/>〉に拠る。)(平成 24 年 3 月 5 日追加)

大正 13(1924)年

・歌垣の源流(上) 社会学雑誌第 2 号(大正 13 年 6 月 1 日刊)47-67 頁(註: 社会学雑誌: 日本社会学会、大正 13 年 5 月創刊号刊行)
・歌垣の源流(下) 社会学雑誌第 3 号(大正 13 年 7 月 1 日刊)45-69 頁
・歌垣補考 社会学雑誌第 4 号(大正 13 年 8 月 1 日刊)90 頁

大正 14(1925)年

・タイヤル人の社会編制 社会学雑誌第 12 号(大正 14 年 4 月 1 日刊)18-39 頁(註: タイヤル人の社会編制(1)に該当)
・タイヤル人の社会編制(2・完) 社会学雑誌第 14 号(大正 14 年 6 月刊)48-79 頁

大正 15(昭和元、1926)年

・〈書評〉(紹介批評)松岡静雄著『太平洋民族誌』 社会学雑誌第 21 号(大正 15 年 1 月 1 日刊)104、105 頁(註: 松岡静雄〈1877~1936〉『太平洋民族誌』〈岡書院、大正 14 年 10 月刊〉、文中で自身を「著者〈松岡氏〉の不肖な一弟子」〈104 頁〉という。)(註記補正: 平成 20 年 1 月 10 日)
・〈書評〉(紹介批評)鳥居龍蔵『人類学上より見たる我が上代の文化』第一巻 社会学雑誌第 25 号(大正 15 年 5 月 1 日刊)93-96 頁(註: 鳥居龍蔵〈1870~1953〉『人類学上より見たる我が上代の文化』第一巻〈叢文閣、大正 14 年 10 月刊〉)(追記: 平成 20 年 1 月 10 日)
・穂積陳重博士の日本法学に於ける意義 社会学雑誌第 26 号(大正 15 年 6 月 1 日刊)18-34 頁(註: 本号は穂積陳重博士〈1855~1926.4.7〉の追悼記念号、「本号の編輯に就いて」中に、「……………更らに戸田助教授が社会学的立場に於いて(戸田貞三〈1887~1955〉「故穂積陳重博士の社会学説」)、内藤学士が法学的立場に於いて、何れも故先生の学績を偲ばれたる、……………」とある。)(註記補正: 平成 20 年 1 月 10 日)
・児戯と法制史 民族(民族発行所刊)第 1 巻第 5 号(大正 15 年 7 月刊)108-112 頁

- ・浜麦 随筆(人文会出版部刊)第1巻第5号(10月号、大正15年10月1日刊。末尾に「15年8月末日」の記載あり。)6-8頁(同号95頁「本号執筆人名録」：【内藤吉之助】法学士。法制史専攻「れじな」の雅号あり。(1)エンゲルスの翻訳書あり。) (追記:平成19年12月12日)
- ・〈書評〉日本法制史の二収穫 民族第2巻第1号(大正15年11月刊)137-140頁(註:書評:瀧川政次郎〈1897~1992〉『法制史上より観たる日本農民の生活 律令時代 上』(同人社書店、大正15年6月刊)、穂積陳重〈1855~1926〉『実名敬避俗研究』〈刀江書院、大正15年6月刊〉)

昭和2(1927)年

- ・エンゲルスの家族史論 我等(我等社刊)第9巻第1号(奥付:大正15年12月25日印刷納本、大正16〈昭和2〉年1月1日刊)(「家族制度研究」の項目:42-50頁)(覆刻本:『我等(32)』〈日本社会運動史料〈機関紙誌篇〉、法政大学出版局、昭和59年6月20日刊。通し頁160~168頁。老川寛〈1930~〉監修『家族研究論文資料集成 明治 大正 昭和前期篇. 第4巻 家族・家族制度史〈1〉』〈クレス出版、平成12年5月25日刊〉594-602頁に再録。)(覆刻本の件追加:平成20年1月23日)
- ・日本原始法に於ける財物の首章 史学(三田史学会)第6巻第3号(昭和2年9月刊)1-66頁
- ・現時活躍せる論客に対する一人一評論 長谷川万次郎氏(如是閑のこと、1875~1969) 随筆(人文会出版部刊)第2巻第10号(10月特輯号 現論壇批判号、昭和2年10月1日刊。)41頁 (追記:平成19年12月12日)

昭和12(1937)年

- ・経国大典の難産 文宗元年辛未(1451)―成宗元年庚寅(1470) 『京城帝国大学法学会論集 第9冊 朝鮮社会法制史研究』(岩波書店、昭和12年5月15日刊)129-256頁(1-128頁)(文宗:1414~1452、成宗:1457~1497)
- 【参考】田川孝三(1909~1988)「京城帝国大学法文学部と朝鮮文化」『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』(京城帝国大学同窓会、非売品、昭和49年10月30日刊)155、156頁

昭和15(1940)年

- ・暗行御史 『国史辞典』第1巻(富山房、昭和15年2月11日刊)252~253頁(田鳳徳著、渡辺学・李丙洙訳『李朝法制史』〈北望社、昭和46年2月25日刊〉70頁参照。富山房刊『国史辞典』〈全八巻予定〉は戦争のため第1~4巻のみ刊行されて中断との由)(平成29年12月12日追加)

(調査中)

・喪かり考 『史学』第3巻第7号(中山太郎〈1876~1947〉『日本巫女史』〈大岡山書店、昭和5年3月20日刊。増補復刻版: パルトス社、昭和59年1月5日刊〉262頁による。ただし、慶應義塾大学文学部内三田史学会の『史学』には第3巻第7号は存在せず、また、その頃の同誌には、「喪かり考」は掲載されていない。しからば、ここにいう『史学』第3巻第7号とは何か?。)(平成21年2月15日追加)

・前掲中山太郎『日本巫女史』324頁〔註3〕(本文314頁関連)は、内藤教授が物部氏や古代の戦争関係について『宗教研究』に掲載したことを記しているが、表題及び掲載誌巻号数が特定されておらず、現在調査中である。(平成21年2月15日追加)

(3) 内藤吉之助教授関連著作

昭和3(1928)年

・『京城帝国大学一覽』(昭和3年~) 京城帝国大学(『日本植民地教育政策資料集成〈朝鮮編〉』第45巻〈龍溪書舎、平成元年3月刊〉に『京城帝国大学一覽(昭和8年)』〈昭和8年8月31日刊〉、『同(昭和16年)』〈昭和16年9月30日刊〉の復刻あり。)

昭和4(1929)年

・『東京府立第一中学校創立五十年史』(東京府立第一中学校、昭和4年10月20日刊)(巻末に「如蘭会員及現在生徒名簿」あり。同45頁に「明治44年卒業内藤吉之助 法学士 京城大学教授」とあり。)(追記: 平成20年11月23日)

昭和7(1932)年(本年分: 平成27年2月10日追加)

・広津和郎(1891~1968)「随感随想(二) 青い柳」『読売新聞』昭和7年3月29日(火)朝刊4頁(「森れじな」の件に言及)

・広津和郎「随感随想(三) [島崎] 藤村氏の眼識」『読売新聞』昭和7年3月30日(水)朝刊4頁(「森れじな」の件に言及) ⇒上記「3 著作目録 (2) 論説その他」中「明治44(1911)年」分参照。

・「けふ大洋丸の客」『読売新聞』昭和7年3月30日(水)夕刊2頁(3月29日午前11時ホノルルから横浜に帰着した大洋丸の客中に「京城帝国大学教授 内藤吉之助」の名あり。)

・秦 豊吉(1892~1956)「ゴシツプ」欄中「森れじな君」『読売新聞』昭和7年

3月31日(木)朝刊4頁(上記広津和郎記事への回答)

昭和10(1935)年

・『朝鮮人事興信録』(朝鮮人事興信録編纂部、昭和10年4月1日刊)329頁(復刻本:『韓国 近現代史人名録4』〈ソウル・驪江出版社、1987年7月27日刊〉)
(この他、朝鮮刊行の人名録として、『朝鮮人名録 朝鮮年鑑附録』〈京城日報社、各年度版〉等あり。) (追記:平成19年12月18日)

昭和17(1942)年

・ゾーム(1841~1917)著、久保正幡(1911~2010)・世良晃志郎(1917~1989)訳『フランク法とローマ法—ドイツ法史への序論—』(岩波書店、昭和17年4月15日刊)凡例(訳者による内藤教授に対する謝辞がある。様々な意味で興味深い。) (追記:平成21年2月5日、同27年2月10日追加)

昭和22(1947)年

・尾高朝雄(1899~1956)「序」、世良晃志郎(1917~1989)の「あとがき」 エンゲルス著 内藤吉之助訳『家族・私有財産及び国家の起源』(彰考書院、昭和22年2月25日刊、再版:昭和22年9月20日刊、四版:昭和25年6月20日刊)世良「あとがき」によれば、世良教授は内藤教授のことを「私の恩師、故内藤吉之助先生」といつている。また、著者跋も訳者を知る上で貴重である。

昭和23(1948)年

・世良晃志郎(1917~1989)『封建制成立史序説』(彰考書院、昭和23年4月10日刊)扉の次頁に「故 内藤吉之助先生の尊霊に捧ぐ」とあり、「序」の末尾には「謹んで本書を元京城大学教授故内藤吉之助先生の御尊霊に捧げ、私が大学在学中以来先生から受けた御高恩に対して心から感謝の意を表し、併せて故先生の御冥福を祈る次第である。昭 23.2.1」とある。ただし、世良教授の回顧録を収載する福大史学(福島大学)第31号(「私の学問遍歴」、昭和56年2月刊)や法学第49巻第1号(「私の学生時代」、昭和60年4月刊)には記載されていない。

昭和26(1951)年

・旗田 巍(1908~1994)『朝鮮史』(岩波全書、岩波書店、昭和26年12月15日刊)(文献解題)(「岩波全書セレクション」の一冊として復刊、平成20年2月28日刊)(追記:平成20年8月12日)

昭和30(1955)年

- ・永富撫松遺稿、今田哲夫訳註『訳註 春及廬詩藁』(鹿島守之助、昭和 30 年 9 月 20 日刊)(永富撫松: 鹿島氏尊父敏夫氏、1864~1913、今田哲夫: 1898~1994)
- ・矢野峰人(1894~1988)「仮名匿名」『イソラベラ』(Isola Bella)第 5 号(昭和 30 年 10 月 20 日) ⇒ 下記「(4) 『イソラベラ』と内藤吉之助教授」参照。

昭和 31(1956)年

- ・西谷弥兵衛(1914~1968)『鹿島守之助伝』(日本財界人物伝全集第 12 巻、東洋書館、昭和 31 年 8 月 1 日刊)79、80 頁(「森れじな」のことに言及。後、『鹿島守之助経営論選集別巻 1 鹿島守之助伝』(鹿島出版会、昭和 50 年 3 月 20 日刊)61 頁)

昭和 33(1958)年

- ・鹿島守之助『春及廬随談—わが思想と行動—』(岩手放送、昭和 33 年 12 月 15 日刊、鈴木彦次郎氏〈1898~1975〉との対談をまとめたもの。)37 頁(内藤教授のことに言及)。後、『わが回想録—思想と行動—』(鹿島研究所出版会、昭和 40 年 4 月 10 日刊)32 頁、『鹿島守之助経営論選集第 12 巻 わが回想録—思想と行動』(鹿島研究所出版会、昭和 50 年 1 月 20 日刊)24 頁に再録。(平成 29 年 9 月 6 日一部修正)

昭和 34(1959)年

- ・柳田國男(1875~1962)『故郷七十年』(神戸・のじぎく文庫、昭和 34 年 11 月 20 日刊)本書はその後各種の版があるが、最近のものでは、例えば『柳田國男全集 21』(筑摩書房、平成 9 年 11 月 20 日刊)がある。この中で、柳田と関係のあった「播州の青年」のことに言及しているが、鹿島守之助氏及びその従兄の岡田 要(1891~1973、動物学者)氏のことが出ている(同書 220 頁参照)。
- ・高橋俊人(1898~1976)「内藤(進一郎)先生のことども—法輪院進阿即生居士に—」『藤嶺文学』第 17 号(昭和 34 年? 月刊、藤沢高校文芸部雑誌か。平成 18 年秋に復刻予定との由で、その前に下記ネットに掲載された。)。ここに内藤先生とは、内藤教授の令弟内藤進一郎氏(? ~1958)のことであるが、内藤教授のことに詳しい。〈<http://sky.geocities.jp/ityou2/bungaku.html>〉(平成 19 年 12 月 12 日閲覧。ただし、平成 20 年 11 月 23 日現在では削除か〈かなり前から未確認状態であった。〉)。平成 21 年 3 月 18 日現在でも同様。)

昭和 39(1964)年

- ・鹿島守之助「私の履歴書」『私の履歴書 第 22 集』(日本経済新聞社、昭和 39 年 11 月 25 日刊)221 頁で内藤教授のことに言及、その後、同『私の履歴書』(鹿

島研究所出版会、昭和 39 年 12 月 20 日刊)11、12 頁に再録。同稿は、更に『私の履歴書 経済人 7』(日本経済新聞社、昭和 55 年 9 月 2 日刊)281 頁、『私の履歴書 昭和の経営者群像 2』(日本経済新聞社、平成 4 年 9 月 25 日刊)92 頁等に転載されている。また、鹿島守之助『創造の生活』(鹿島研究所出版会、昭和 43 年 6 月刊)、『鹿島守之助経営論選集第 13 巻 創造の生活』(鹿島出版会、昭和 50 年 2 月 20 日刊)18 頁にも再録。

昭和 40(1965)年

・鹿島守之助『わが回想録—思想と行動—』(鹿島研究所出版会、昭和 40 年 4 月 10 日刊)15 頁(内藤教授のことに言及)の内容は上記『春及廬随談—わが思想と行動—』(岩手放送、昭和 33 年 12 月 15 日刊)と同じ。なお、追記あり。

昭和 41(1966)年

・朝鮮史研究会・旗田 巍(1908~1994)編『朝鮮史入門』(太平出版社、昭和 41 年 11 月刊)(〈改装第 1 刷〉昭和 45 年 11 月 30 日刊 256 頁)
・安倍能成(1883~1966)『我が生ひ立ち—自叙伝—』(岩波書店、昭和 41 年 11 月 28 日刊)561 頁 (追記: 平成 21 年 3 月 18 日)

昭和 43(1968)年

・永富家編集委員会『永富家』(鹿島研究所出版会、昭和 43 年 11 月 1 日刊)5、111、114、169 頁
(ネット「永富家」 〈<http://www.kct.ne.jp/~kshimizu/nagatomi.htm>〉 参照。)

昭和 44(1969)年

・旗田 巍(1908~1994)編『シンポジウム・日本と朝鮮』(勁草書房、昭和 44 年 1 月 30 日刊)52 頁

昭和 45(1970)年

・『定本 柳田國男集』第 27 巻(新装版、筑摩書房、昭和 45 年 8 月 20 日刊)27 頁(山島民譚集(1) 河童駒引)(後掲『柳田國男全集』第 2 巻参照。)

(追記: 平成 20 年 8 月 12 日追加)

・『定本 柳田國男集』第 30 巻(新装版、筑摩書房、昭和 45 年 11 月 20 日刊)449 頁(「民族」雑篇、「北方文明研究会の創立」)(後掲『柳田國男全集』第 26 巻参照。)
(追記: 平成 20 年 8 月 12 日)

昭和 46(1971)年

・田鳳徳著、渡辺 学・李丙洙訳『李朝法制史』(北望社、昭和 46 年 2 月 25 日刊)原著者序文 i、16、70、71、220、361(清宮四郎〈1898~1989〉「跋」)頁
原著者序文 i: 「・・・、著者がまだ若かった学窓生活の当時、京城帝国大学法文学部故内藤吉之助教授(法制史担当)から直接指導を忝くし、緻密な考証による感化を賜わったことは、終生これを忘れることができない。」
なお、原著は『韓国法制史研究(暗行御史他六編)』と題し、ソウル大学出版部より刊行されたものとの由。(平成 29 年 12 月 13 日追加)

〈 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jalha1951/1973/23/1973_23_243/article-char/ja/〉

昭和 49(1974)年

・『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』(京城帝国大学同窓会、非売品、昭和 49 年 10 月 30 日刊)(口絵に内藤教授の小照あり。戸沢鉄彦(1893~1980)「京城帝国大学創立五十周年にあたって」〈109 頁〉、田川孝三「京城帝国大学法文学部と朝鮮文化」〈155、156 頁〉)(一部補正: 平成 19 年 12 月 18 日、平成 20 年 1 月 17 日)

昭和 50(1975)年

・鹿島守之助『鹿島守之助経営論選集第 12 巻 わが回想録—思想と行動』(鹿島研究所出版会、昭和 50 年 1 月 20 日刊)24 頁(内藤教授のことに言及)の内容は上記『春及廬随談—わが思想と行動—』(岩手放送、昭和 33 年 12 月 15 日刊)と同じ。(平成 29 年 9 月 6 日追加)

昭和 52(1977)年

・木村 毅(1894~1974)「文学少年としての鹿島さん」『鹿島守之助追懐録』(鹿島守之助追懐録刊行委員会編集、昭和 52 年 12 月 3 日刊)84-87 頁(「森れじな」のことに言及)
・永富きよ「若き日の兄を偲ぶ」『鹿島守之助追懐録』(鹿島守之助追懐録刊行委員会編集、昭和 52 年 12 月 3 日刊)331-335 頁(「森れじな」のことに言及)

昭和 54(1979)年

・岡 正雄(1898~1982)『異人その他 日本民族=文化の源流と日本国家の形成』(言叢社、昭和 54 年 12 月 1 日刊)「岡正雄 年譜」482 頁「大正 14 年(1925)27 歳 4 月、神奈川県藤沢町鵜沼に転居。当時鵜沼在住の田辺寿利、内藤吉之助、何思敬君らと日夜交友す。」(『異人その他 岡正雄論文集』〈岩波文庫、平成 6 年 11 月刊〉には収録されていない。) (追記: 平成 21 年 11 月 15 日)

昭和 62(1987)年

・岩野英夫「わが国における法史学の歩み(1873-1945)—法制史関連科目担任者の変遷—」 『同志社法学』第 39 巻第 1・2 号(第 200 号記念論集 I、昭和 62 年 7 月 31 日刊)(225-312 頁)

昭和 63(1988)年

・柳田国男研究会編著『柳田国男伝』(三一書房、昭和 63 年 11 月 30 日刊、別冊ともで 2 冊)728、731、743 頁 (追記: 平成 20 年 1 月 11 日)

平成 2(1990)年

・松岡磐木(1919~1995)「父松岡静雄のこと」『沖縄文化研究』(法政大学)第 16 号(平成 2 年 3 月 20 日刊)83-96 頁(92 頁に内藤吉之助教授関係の記載あり。)

(追記: 平成 20 年 1 月 10 日)

・『第七高等学校造士館同窓会会員名簿 平成 2 年』(七高同窓会、平成 2 年 10 月 25 日刊)101 頁(内藤吉之助: 大正 4 年第 12 回卒業 171 名、独法科、兵庫、東大法)

(追記: 平成 20 年 8 月 12 日)

平成 7(1995)年

・久保正幡(1911~2010)(報告)「中田薫先生の思い出と法制史学会の回顧」(平成法制史学会東京部会第 170 回例会、平成 7 (1995) 年 12 月 26 日 (火) 午後、於早稲田大学。中田 薫博士 (1877~1967) と横田正俊氏 (元最高裁長官、1899~1984) ・内藤吉之助教授との関係についても特に言及されたと仄聞する。)

(平成 30 年 8 月 29 日追加)

平成 8(1996)年

・高橋菊江(1925~)『赤煉瓦の家』(ドメス出版、平成 8 年 6 月刊)(平成 21 年 3 月内藤丈二先生の御示教に拠る。誌して深甚の謝意を表するものである。)

(追記: 平成 21 年 3 月 18 日)

平成 9(1997)年

・『柳田國男全集』第 2 巻(筑摩書房、平成 9 年 10 月 20 日刊)423 頁(山島民譚集(1) 河童駒引)

(追記: 平成 20 年 8 月 12 日)

平成 10(1998)年

・久保正幡(1911~2010)『久保正幡略年譜・主要著作目録』(製作: 洋販、平成

10年10月20日刊)5頁

(追記:平成30年8月28日)

平成12(2000)年

- ・『柳田國男全集』第26巻(大正11年~大正14年、筑摩書房、平成12年6月15日刊)488頁(「北方文明研究会の創立」『民族』第1巻第1号〈大正14年11月1日刊〉)、同615頁(同書解題) (追記:平成20年8月12日)

平成14(2002)年

- ・研究代表者岩野英夫『法学教育における法史学の存在価値—わが国における法史学の成立と展開との関連で—』平成11年度—平成13年度科学研究費補助金(基盤研究〈C〉〈2〉)研究成果報告(平成14年3月刊)(註:これには、前掲岩野英夫「わが国における法史学の歩み(1873—1945)—法制史関連科目担任者の変遷—」『同志社法学』第39巻第1・2号〈昭和62年7月31日刊〉の修正版が収録されている。)

平成20(2008)年

- ・通堂あゆみ「京城帝国大学法文学部の再検討—法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に—」『史学雑誌』第117編第2号(平成20年2月20日刊)67頁
「【表2-1】法科系講座担当者キャリア」 (追記:平成21年3月31日)

平成23(2011)年

- ・佐々木研一朗「東京帝国大学法学部助手に関する—考察—大正期を中心に—」『政治学研究論集』(明治大学)第34号(平成23年10月刊)283頁(平成29年3月10日追加)

https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/bitstream/10291/17553/1/seijigakuronshu_34_275.pdf#search=%27%E5%86%85%E8%97%A4%E5%90%89%E4%B9%8B%E5%8A%A9%27

平成26(2014)年

- ・酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』(ゆまに書房、平成26年2月25日刊)122、368、369頁 (平成26年5月27日追加)

平成30(2018)年

- ・「内藤吉之助教授について—略年譜、著作目録抄、その他—」『法史学研究会会報』第21号(岡野誠先生退休記念号、平成30年3月26日刊)119~125頁 (平成30年8月30日追加)

(4) 『イソラベラ』と内藤吉之助教授

初校校了後、「内藤吉之助教授略年譜・著作目録(初稿)」を、念のため、先に知人に見てもらったところ、① 内藤教授と世良晃志郎教授(1917~1989)の関係がどのようなものであったのかをよく調べてみることに、② 京城における内藤教授のことが出ているという上記「(3) 内藤吉之助教授関連著作」中の『イソラベラ』昭和 30 年 10 月号は現物を探索してやはり見ておくべきではないか、との指摘を受けたので、一、二試みてみた。

①については、ここでは省略するが、この問題は、非常に深い意味を有しているやに思われるので、更に探究の要がある。

次に、②の『イソラベラ』昭和 30 年 10 月号の件であるが、これは、ネットにある高橋俊人氏(1898~1976)「内藤(進一郎、? ~1958)先生のことども一法輪院進阿即生居士に一」(<http://sky.geocities.jp/ityou2/bungaku.html>)、『藤嶺文学』第 17 号〈昭和 34 年? 月刊、藤沢高校〈現 藤嶺学園藤沢高校〉文芸部雑誌か。平成 18 年秋に復刻予定との由で、その前に上記ネットに掲載された。平成 19 年 12 月 12 日閲覧。ただし、平成 20 年 8 月現在では削除されており、その後も見る事ができない状態にある。)の中の「余談ではあるが、「森れじな」と云う名は、当時の投稿家の間では、長く忘れられず、後に文壇知名の人になった矢野峯人(ママ、峰人)、片岡鉄兵、高田浪吉、中村白葉等の人々の記憶に残っていたようである。嘗てアルピニストで、山の詩人でもある藤本九一氏(ママ、藤本九三〈1887~1970〉)が朝鮮旅行した時、京城で歓迎会を催されたが、その折り出席した内藤京城大教授が、昔の森れじな氏の後身であるのを知って、驚きもし、なつかしくも思ったという一文を書いた。それを又矢野峯人(ママ、峰人)教授が読んで、「イゾラベラ」(isola bella)(ママ、『イソラベラ』〈Isola Bella〉)と云う雑誌で紹介して、転々感慨にふけていた。この「イゾラベラ」(ママ、「イソラベラ」)は有名無名の旧文章世界投稿家たちだけの雑誌で、その主宰者津端修氏(1895~1980)は、わたくしの友人でもあるので、一昨々年が(ママ)、国枝完二(ママ、邦枝完二)をたずねて来た時に、拙宅に立ち寄ったので、「森れじなの弟で内藤進一郎と云う人を知っているから、紹介しようか」と云ったら、「是非たのむ」とのことではあったが、ほどなく津端が脳出血で倒れてしまったので、それなりになってしまったのは遺憾である。なお矢野峯人(ママ、峰人)氏の書いた文の掲載されたのは、「イゾラベラ」(ママ、「イソラベラ」)の昭和三十年十月号である。」との記述による。

このことにより、なんとしても「イゾラベラ」昭和 30 年 10 月号を読みたいと思ったが、「イゾラベラ」でネット検索をしてもヒットしなかったため、上記知人に聞いたところ、イタリア語では isola は「イーゾラ」と濁るが、いずれ

にせよ、「isola bella」(美しい島)のことであるので、「イソラベラ」で再度検索してみても教えてもらった。これで、漸く当該号所蔵機関を一箇所見つけ、読むことが出来た次第である。知識貧困にして、「イソラベラ」だけで引いて、検索できず、全くお粗末なことであった。

この結果、高橋俊人氏がいつておられるのは、矢野峰人博士(1894~1988)「仮名匿名」『イソラベラ』(Isola Bella)第5号(昭和30年10月20日刊)の冒頭部分のことであることが判明したが、その内容は、「いつ頃の事であつたか、勿論大戦前の話であるが、登山家として有名な「朝日」の藤木九三氏(ママ、藤木九三〈1887~1970〉)が書いた随筆の中に、氏が朝鮮旅行の際、京城で催された歓迎会出席者名簿に「森れじな」の名前を発見し、それが京城医大(ママ、京城帝大)某教授の投書家時代の筆名であつたのに驚いた事が記されてゐたのを記憶する。」(4頁)である。

峰人矢野禾積といえば、最近『矢野峰人選集 1 エッセイ・詩・訳詩』(国書刊行会、平成19年6月15日刊)が刊行されたが、三高「行春哀歌」(大正3年作、<http://www2s.biglobe.ne.jp/~tbc00346/component/gyosyun.html>)参照。)の作詞者としても有名な方(例えば同書498~502頁所収の「行春哀歌」、「『行春哀歌』の曲譜」参照。)であり、この一文は、極めて興味深いものがある。ただ、これでは、やはり藤木九三氏の書いた元の文章の内容がよく把握できないので、藤木氏の著書とか朝日新聞掲載の多数の記事等を探す必要があるが、今回は、ここまでしか出来なかった。次の課題としたい。なお、藤木氏は、昭和9(1934)年12月の京都帝国大学の巖冬期白頭山登山隊に報道部員として参加しているので、まずこのあたりから調べていければと考えている⁵。

以上、とりとめもないことを誌したが、多くの過誤があることと思うので、御教示の程を切にお願いいたすものである。

(以上)

⁵ (本件についての平成20年8月12日追記)

白頭山登山に関し藤木九三氏の書かれた文献を、その後二、三渉猟したが、遺憾ながら、現在まで発見できていない。『朝日新聞』、『週刊朝日』(例えば、「冬の白頭山遠征」〈第26巻第30号、昭和9年12月30日刊、15頁〉がある。)、『文藝春秋』(例えば、「白頭山遠征所感」〈第13年第3号、昭和10年3月1日刊、37、38頁〉)では、「森れじな」との邂逅のことは確認できない。これらよりすると、あるいは、白頭山登山の際ではなく、別の機会だったのかも知れない。更に調査したい。

〔参考1〕「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」の件

本稿作成に当たり利用できた皓星社〈<http://www.libro-koseisha.co.jp/>〉の「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引データベース」の無償公開は、平成20(2008)年3月31日で終了し、同年7月1日より新たなものに移行したという。本件についての皓星社のお知らせ記事は、下記のとおりである。データベースは、この種資料作成上寔に貴重なものであるため、ここにも、掲載させていただくこととする。(〈<http://www.annex-net.jp/ks1/>〉に拠る。)。なお、『日本経済新聞』平成19年12月16日「フロントライン」も参照。

① (平成20年8月19日追加)

〈<http://www.libro-koseisha.co.jp/sinbun/n071216.jpg>〉

「お知らせ 「明治・大正・昭和前期雑誌記事データベース」の無償公開は2008年3月末日で終了いたしました。4月1日〈マ〉から「雑誌記事索引集成データベース」としてサービスを開始します。「雑誌記事索引集成データベース」は、戦前期の「明治・大正・昭和前期雑誌記事データベース」に、国立国会図書館の「雑誌記事索引」および岩田書院等の協力で『地方史文献年鑑』などの地方雑誌のデータを搭載しています。これによって明治から現在まで、全国誌から地方誌までをワンストップで検索することができます。また国立情報学研究所のWEBCATとの連携で掲載誌の所蔵機関を同時に表示します。データは過去の資産(目録、索引、総目次など)を活用しているため、訂正・追加の必要がありますが、これらの修正、一次資料との照合、追加入力、一次資料からの採録などエンドレスに作業を続けて参ります。修正や追加の情報をお持ちの方にはご協力をお願いいたします。

詳しくは下記にお問い合わせください。

所属機関の図書館または居住する地域の公共図書館

丸善株式会社 epro-j@maruzen.co.jp

株式会社皓星社 <http://www.libro-koseisha.co.jp/>」

② (平成20年11月23日再追加)

〈<http://www.annex-net.jp/ks1/>〉

「明治・大正・昭和前期雑誌記事データベース」無償公開は2008年3月末日で終了いたしました。7月1日から「雑誌記事索引集成データベース」としてサービスを開始しました。

■明治初期から現在まで

国立国会図書館(NDL)の「雑誌記事索引」は、昭和23年以降現在までを収録する邦文雑誌記事のデータベースです。ところが、この「雑誌記事索引」は、それ以前の記事は検索できません。

皓星社では、それを補うため過去における雑誌記事索引類を集大成して『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』(120巻)を刊行。雑誌記事索引集成DB

は、この『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』を基に作成されました。今後、あらゆる目録、総目次を追加入力して、過去に刊行された全ての雑誌に掲載された記事の検索を可能にすることを目指します。また、国立国会図書館の「雑誌記事索引」のファイルを完全搭載しますので明治から現在までの雑誌記事がシームレスに検索できます。

■総合雑誌から地方誌まで

国立国会図書館の「雑誌記事索引」では、地方で刊行された多くの雑誌類が採録の対象となっておりません。これらの地方誌にも多くの重要な記事・論文が掲載されています。先進的な県や市では地元発行の雑誌や地元を対象とした記事のデータベースを作成公開しています。

しかし、地方の情報もそれぞれの県や市に限られるものではなく、全国誌から地方誌を横断した検索のできるデータベースの出現が待たれていました。皓星社では、地方史研究協議会はじめさまざまな機関・個人の協力を得て、地方誌の論文・記事、総目次などの入力を開始しこれらの検索を可能にしました。これによって、全国誌から地方誌までの雑誌記事がシームレスに検索できます。

■記事検索から所蔵情報まで

検索しても目的の記事を手に入れるためには、雑誌の所蔵情報が必要です。そのため国立情報学研究所(NII)の協力で、検索結果と同時にNIIのWebcatの検索結果および国立国会図書館(NDL)のOPACの検索結果を表示。これによって、国立国会図書館および全国の大学等の当該雑誌の所蔵状況をワンストップで知ることができます。

■新旧字対応を可能にする独自の用語集

雑誌記事索引集成DBは、明治から現在まで150年近い期間と、さまざまな目録を一つにまとめるものですので、用字用語の変遷に対応する独自の用語集を構築しています。したがって、たとえば「蘇聯」「ソ同盟」「ソウエート」なども「ソ連」、「加奈陀」も「カナダ」と入力することで検索できます。雑誌『白樺』では、ゴッホは「ゴオホ」と表記されていますが、ゴッホと入力すれば、「ゴオホ」もヒットします。これは今後も改良を重ねます。データは過去の資産(目録、索引、総目次など)を活用しているため、訂正・追加の必要がありますが、これらの修正、一次資料との照合、追加入力、一次資料からの採録などエンドレスに作業を続けて参ります。

修正や追加の情報をお持ちの方にはご協力をお願いいたします。

詳しくは下記にお問い合わせください。

所属機関の図書館または居住する地域の公共図書館

丸善株式会社 epro-j@maruzen.co.jp

株式会社皓星社 <http://www.libro-koseisha.co.jp/> 」

③ (平成21年3月18日再々追加)

〈<http://info.zassaku-plus.com/#cate2>〉

〈 <http://www.maruzen.co.jp/home/irn/econtents/catalog/zassaku/zassaku.html> 〉

④ (平成 22 年 9 月 15 再々々追加)

上述のように、皓星社「雑誌記事索引集成データベース」は、更に内容の充実が図られたが、それに伴い、事業化された。

- ・「雑誌記事索引集成データベース」

〈http://pro.maruzen.jp/ln/ec/ec_kousei01.html〉

〈<http://zassaku-plus.com/authorize.php>〉

問題は、同データベースが、大学図書館とか研究所は別にして、しばらくの間、何故か、国公立の図書館にほとんど入らず、市井の人間には簡単に利用できなかったことである。しかしながら、漸く、本平成 22(2010)年 4 月に、東京都立中央図書館が初めて導入し、次いで、正式な日付は不明であるが、国立国会図書館でも導入されたようである(平成 22 年 8 月 25 日閲覧済)。これで、一般の者でも、自由に検索できることと相成った。いずれにせよ、今後は、プリント対応をも含めて、如何に効率よく整理できるかが鍵となるものと思われる。

(平成 22 年 9 月 15 日追加)

⑤ 本 HP 別稿「ローマ法・法制史関係冊子版主要文献目録一覧(二訂稿)」(平成 18 (2006) 年 10 月 1 日アップ、逐次改訂中)参照。(平成 22 年 10 月 16 日追加)

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/bunkenmokuroku.pdf>〉

(平成 22 年 10 月 16 日追加)

⑥ 現在は「雑誌記事索引集成データベース(ざっさくプラス)」として有料公開されている。

〈https://zassaku-plus.com/service/login?return_url=http%3A%2F%2Fzassaku-plus.com%2F〉(平成 29 年 9 月 6 日追加)

[参考 2] 「国立国会図書館サーチ(開発版)の公開」の件(平成 22 年 9 月 15 日追加)

平成 22(2010)年 8 月、「国立国会図書館サーチ(開発版)」が公開され、著作等の検索が、飛躍的に便利になった 〈<http://iss.ndl.go.jp/>〉。更なる利用が望まれる。

(参考: 「国立国会図書館サーチ(平成 22 年 8 月 17 日開発版)の公開について」

(2010 年 8 月 17 日) 〈<http://iss.ndl.go.jp/information/2010/08/releasenote/>〉)

(平成 27 年 2 月 10 日追加) ⇒ 現在では「国立国会図書館サーチ」

〈<http://iss.ndl.go.jp/>〉を参照。

[参考 3] 「国立国会図書館のデジタル化資料」の件(平成 24 年 3 月 5 日追加)

平成 23(2011)年 7 月、「国立国会図書館のデジタル化資料」が公開され、一層利便性が増した。(平成 27 年 2 月 10 日追加) ⇒現在では国立国会図書館〈<http://www.ndl.go.jp/>〉「電子図書館」参照。

(以上)